

## 八木健の滑稽俳句を分析する (二)

～動物への眼差し～

木藤隆雄

八木さんの句には、動物を詠んだものが多い。

初蝶のふらつく癖は叱られず  
蓑虫として引力に逆らはず  
炎天の温度を測る犬の舌  
草だけを食べて馬肥ゆ不思議かな  
樹の中の虫が見えるか啄木鳥は  
食べ物に不自由はなし穀象虫  
馬鹿貝と呼ばれてゐるを知らぬ貝  
誰も知らない蝉時雨の蝉の数  
外泊の理由を言へずうかれ猫  
螻蛄の親譲りなる喧嘩腰

最近になって、十代の頃に読んだ夏目漱石の「吾輩は猫である」を読み直してみた。作中に、猫と螻蛄が戦うシーンがある。漱石の文章は、猫の爪の向きまで描写していて面白かった。すぐれた文学者や俳人には、人並外れた観察眼が備わっているのではないかと思う。

八木さんの目は、更に小さきものへも向けられる。

体重を測るのに難糸トンボ  
後方の蟻は知らない目的地  
血液型に無関心な藪蚊ども

八木さんはアナウンサーなので、語彙が極めて豊富。その場面に一番適切な言葉を使う名人だと思う。

一行の自分史を書きかたつむり

子どもの頃、我が家の庭の木にもかたつむりがいた。彼らが通過した後には微かに光る道の様なものが出来ていた。それを八木さんは「自分史」という言葉を使

った。このセンス！

気の早い赤とんぼが偵察に

そういえば、赤とんぼの飛び方は、空中でしばらく止まり、又飛び始めるように見える。それはあたかも「偵察」をしているかのようだ。十七音しかない中で如何に表現するか。それは、どの言葉を選ぶかによるところが大きい。

親日家なのか越冬つばめ君

毛虫の毛専守防衛してをりぬ

鹿たちの角はいはゆる角兵器

「親日家」「専守防衛」「角兵器」という言葉の選択は出来るようでなかなか出来ない。言葉を沢山持っているという事が、八木さんの最大の武器だと思う。

源五郎の呼び名にメスが不快感

思わず笑ってしまったが、この句の奥には、最近話題のジェンダー問題が潜んでいる気もする。

動物の中にも、可愛いもの、怖いもの、何となく気持ち悪いものなど様々である。おそらく蜥蜴を好きな人はあまりいないだろう。あの光沢が何となく怪しい。また何十年かかっても心を開いてくれそうにない。正直、私は蜥蜴が嫌いだ。だが、八木さんは意外なことに、結構句に詠んでいる。

すばしこいそれが蜥蜴の生きる知恵

三十六計逃げるが勝ちと蜥蜴君

そういえば、昔は我が家の庭の石の上で日向ぼこをしていた蜥蜴も、最近とんと見かけなくなった。父が元気だった頃は、手入れの行き届いたきれいな庭で、花や緑の木々がいっぱいだった。そこには沢山の小動物がいて、それぞれが精一杯に生きていた。

肘張ってこの池を出ずあめんぼう

